

黒毛和種^{もとうし}高能力素牛^{もとうし}を活用した 早期出荷技術と現地適応性

畜産部

1 背景、目的

黒毛和種の子牛に高蛋白低脂肪代用乳を多給した後、粗飼料多給により育成する「高能力素牛^{もとうし}生産技術」（平成 26 年度成果情報）は、肥育期間中の発育性が優れるため出荷時期の短縮が期待できます。一方、県内の哺育育成農家および肥育農家では飼養管理体系が場内試験と異なる場合があります。

そこで、異なる農家が同技術により育成した素牛^{もとうし}を、異なる飼養管理体系で肥育し、早期出荷した場合の枝肉^{えだにく}成績を明らかにすることで、同技術による早期出荷の有効性と現地適応性を確認しました。

2 成果の内容、特徴

- 異なる飼養管理体系においても、黒毛和種の子牛を「高能力素牛^{もとうし}生産技術」で育成することで、哺育育成期間（0～9 か月齢）の日増体量は 1.0kg/日、9 か月齢時体重は 300kg 程度の優良な肥育素牛^{もとうし}「高能力素牛^{もとうし}」を生産することができます（表 1）。
- 引き続きこれらの素牛^{もとうし}を、異なる飼養管理体系で、肥育すると 26 か月齢時の体重は約 760kg 程度になり、良好な発育性を示します（表 2）。
- 27 か月齢で早期出荷した枝肉^{えだにく}成績は、枝肉重量 497kg、BMS No. 6.4、ロース芯面積 61cm² となり、通常の 29 か月齢で出荷した場合と比較して遜色はありません（表 2）。

3 主要なデータなど

表1 哺育育成農家における高能力^{もとうし}素牛の発育状況（平成26～27年）

飼養管理体系			調査戸数	頭数	体重 (kg)			日増体量 (kg/日)
哺育方法	粗飼料				1週齢	3月齢	9月齢	
群飼	ロボット	自給	1	5	45	108	301	1.00
群飼	ロボット	購入	1	4	37	121	311	1.04
単飼	バケツ	購入	1	2	35	101	301	1.00
平均				11	40	111	305	1.01
参考 (場H26)			高能力	5	37	116	292	0.94
			通常	6	36	94	284	0.91

- 注) 1. 粗飼料の「自給」は主に自給粗飼料給与、「購入」は主に購入粗飼料給与。
 2. 哺乳方法の「ロボット」は自動哺乳ロボット、「バケツ」はバケツによる哺乳。
 3. 参考 (場 H26) は、飼養管理体系が単飼でバケツ哺乳、購入粗飼料給与。

表2 肥育農家における高能力^{もとうし}素牛の肥育状況と出荷枝肉成績（平成27～29年）

飼養管理体系		調査戸数	頭数	26月齢 体重 (kg)	日増 体量 (kg/日)	出荷 月齢	枝肉 重量 (kg)	BMS No.	ロース芯 面積 (cm ²)
肥育 方法	配合 飼料								
群飼	購入	2	5	759	0.86	27.6	487	5.8	54.6
群飼	自家	2	4	762	0.89	27.5	512	7.0	71.8
単飼	自家	1	2	747	0.90	27.5	494	7.0	55.5
平均			11	758	0.88	27.6	497	6.4	61.0
参考 (場H26)		高能力	5	775	0.90	28.9	520	5.6	63.0
		通常	6	734	0.84	29.1	495	4.5	54.3

- 注) 1. 配合飼料の「購入」は主に購入配合、「自家」は主に自家^{もとうし}配合給与。
 2. 各農家は、それぞれの飼養管理体系に準じて高能力素牛（表1で哺育育成された11頭）を27か月齢まで肥育。
 3. 参考 (場 H26) は、飼養管理体系が単飼で自家配合飼料給与。29か月齢まで肥育。
 4. BMS No. は脂肪交雑基準（牛肉の霜降り度合を1～12ランクで表したものの）。値が大きいほど霜降りが多いことを示す。
 5. ロース芯面積は、第6～7肋骨間の断面で測定され、値が大きいほど経済価値が高いロースの割合が多いことを示す。